

北京

3月7日

**プログラム** 万学軍中華全国青年連合会主席助理主催歓迎夕食会

面会者	万学軍 (Wan Xuejun) 中華全国青年連合会主席助理
プログラム概要	万学軍中華全国青年連合会主席助理主催による歓迎夕食会では、中華全国青年連合会(全青連)関係者や在中国日本国大使館公使等と夕食を共にし、日中に関する意見交換を行うとともに、日本青年からは日本文化紹介を披露した。

3月8日

**訪問先** 清華大学

面会者	齊興達 (Qi Xingda) 清華大学中国共産主義青年団委副書記
訪問概要	清華大学は中国を代表する名門大学の一つで、数多くの政治家や指導者を輩出してきた大学である。大学の概要説明の後、日本青年と清華大学の学生が四つのグループに分かれ、「学風」「ボランティア活動」「イノベーション・起業」「日中の将来の展望」をテーマにディスカッションを行った。その後、清華大学学生の案内によりキャンパスを散策した。

**訪問先** 汪鴻雁中華全国青年連合会副主席表敬訪問

面会者	汪鴻雁 (Wang Hongyan) 中華全国青年連合会副主席 伍偉 (Wu Wei) 秘書
訪問概要	全青連は中国共産主義青年団を核とする各青年団体の連合組織である。汪鴻雁副主席を表敬訪問し、主席より歓迎の挨拶並びに日中両国の友好関係の歩みについてお話しいただいた後、質疑応答の時間をいただいた。

**プログラム** 中国事情に関する講義

面会者	中国社会科学院国際戦略研究所 王金波 (Wang Jinbo) 副研究員
プログラム概要	中国の「第13次五カ年計画」をテーマとした講義を受講した。2015年から2020年までの5年間の目標や展望(中国の発展の可能性とそれに伴う問題点等)に関する講義と質疑応答を行った。

3月9日

**訪問先** 「Youth.ch (中国青年網)」インターネット・映画テレビセンター

面会者	郝向宏 (Hao Xianghong) 中国青年網総裁兼編集長
訪問概要	「Youth.ch (中国青年網)」は、インターネット、映画、ドラマ等様々なメディアを通して中国の青少年へ情報やコンテンツを発信するウェブサイトである。「Youth.ch (中国青年網)」は「青年の声」や18歳以下の青少年向けの「未来網」等のウェブサイトを運営しており、青少年同士のコミュニケーションの支援や、青少年のささやかな願いごとの実現を支援する活動等を行っている。それぞれの概要説明を聞いた後、総裁から歓迎挨拶を受け、質疑応答を行った。

## 訪問先

## 史家胡同博物館

面会者	孟憲起 (Meng Xiangqi) 氏、宋杰 (Song Jie) 氏、楊素茵 (Yang Suyin) 氏 (北京市ボランティア連合会) 胡意麟 (Hu Yilin) 先生 (新鮮胡同小学校)
訪問概要	史家胡同博物館は北京で最初の胡同博物館である。ボランティアの方々の案内により、胡同の構造や歴史、四合院について説明を受けた。その後、新鮮胡同小学校の先生の指導の下、同校の児童12名と一緒に甲骨文字の書道体験をし、「龍」という文字を書いた。

## 3月10日

## 訪問先

## 在中国日本国大使館表敬訪問

面会者	山本恭司 公使 森本悠介 一等秘書
訪問概要	山本恭司公使から、ネット社会が発達した現代中国で特に重要となった公共外交等について、御自身の経験を交えた説明があった。インターネットを通じた広報活動の重要性と、インターネット上での交流の先に必要とされる人対人の交流、即ち本事業の価値と意義について学ぶ機会となった。帰国後もSNS等を活用し、本事業を通して学んだことを積極的に発信することの重要性を再認識した。

## 訪問先

## 中国国際青年交流センター

面会者	洪桂梅 (Hong Guimei) 副主任
訪問概要	中国国際青年交流センターは、国際青年交流の役割を担う全青連の傘下組織である。中国青年と世界各国の青年との相互理解・相互交流や環境保全、文化・スポーツ交流等の多岐に渡った国際交流事業に取り組んでいる。概要について説明を受けた後、六つのグループに分かれ、中国の家庭料理の一つである餃子作りを体験した。

## 景德鎮

## 3月12日

## プログラム

## ホストファミリーとの交流夕食会

面会者	汪劍 (Wang Jianying) 江西省青年連合会秘書長 張霞 (Zhang Xia) 江西省青年連合会秘書処 徐新穎 (Xu Xinying) 共青团景德鎮市委書記
プログラム概要	お世話になったホストファミリーらと夕食を楽しんだ。中国の伝統的な踊りや古典楽器である二胡の演奏、ダンス等の演目で歓待を受け、日本青年からは、日本文化の紹介としてよさこい踊りや傘踊り、昨年日本で流行した曲のダンスを披露するとともに、中国で人気のポップスを中国語で歌唱した。メッセージノートや記念品の交換を行い、今後の日中友好を誓った。

3月13日

訪問先

江西省労働模範スタジオ「比玉堂」

面会者	陶芸家 欧陽敏 (Ouyang Min) 氏
訪問概要	陶磁器の製作過程やデザイン、絵付けの技法、学生の創作活動に対する支援等について説明を受けた後、日本青年は講師の指導のもと、各自、湯呑みに桜を描く絵付け体験をした。その後行われた文化創造産業に携わる青年との座談会では、芸術家の方々と景德鎮陶磁大学の教授、学生から芸術家としての心構えや伝統文化の継承についてお話を聞いた。

訪問先

景德鎮陶磁大学

面会者	寧鋼 (Ning Gang) 副学長 陳国勝 (Chen Guosheng) 景德鎮市委講師团团長
訪問概要	景德鎮陶磁大学は100年を超える歴史があり、三つの学科と46の専攻を備えた、2万人の学生を有する大学である。作品館や研究センターにて陶磁器の歴史やデザイン、技法の変遷等を学んだ。歓迎式では寧鋼副学長より歓迎の挨拶を賜り、日本人留学生によるスピーチと、陳国勝氏による景德鎮市の発展に関する講義を受講した。その後の学生との懇談会では、三つのグループに分かれ、「ボランティア活動」「伝統文化の受け継ぎと交流」「創造力の育成と個人創業」のテーマでディスカッションを行った。

3月14日

訪問先

進坑村

面会者	黄薇 (Huang Wei) 東郊学堂ディレクター
訪問概要	進坑村は景德鎮市の東郊外に位置し、「景德鎮のゆりかご」とも呼ばれる村落である。進坑村史館には「水土宜陶」という言葉があり、陶磁器の町としてふさわしい景德鎮を表している。宋代の「龍窯」と呼ばれる登り窯跡等を見学し、東郊学堂では展示物についての紹介を受けた後、17世紀における陶磁器を媒介とした日中交流の歴史について学んだ。最後に記念植樹を行った。

訪問先

ギャラリー「MZ・名鎮瓷毯」、景德鎮市大美至尚陶磁文化創意有限公司

面会者	欧陽琦 (Ouyang Qi) 董事長
訪問概要	ホストファミリーの一人が経営する、陶磁器の製作、加工、販売を一体化した会社を見学した。茶器や食器を始めとした高級陶磁器や、2016年に杭州で開催されたG20で使用された食器も取り扱っており、中南海(国家指導者官邸)で使用されるの器や金糸の装飾が施された壺等を拝見した。

訪問先

中国陶磁博物館

訪問概要	中国陶磁博物館は陶磁器をテーマにした中国最初の博物館であり、景德鎮の磁器を中心に時代別に展示されている。「景德鎮」という地名の由来や、磁器の製作過程及び原材料等について説明を受け、絵柄や色使いといったデザインが時代ごとに異なる特徴を持つことを学んだ。
------	---

訪問先

景德鎮御窯廠遺跡

訪問概要	景德鎮御窯廠遺跡は皇帝用の磁器を製造するための窯の遺跡である。昨年発掘された明代の窯、馬蹄や瓢箪をかたどった明代の窯等の遺跡、職人の生活用として使用されていた井戸、窯の神様を祀った祠等を見学した。
------	--

## 深圳

### 3月15日

#### 訪問先 前海地区展示場

面会者	馬雨龍 (Ma Yulong) 前海連合發展ホールディングス經理
訪問概要	前海地区展示場は、前海自由貿易区の設立経緯や事業計画、發展の状況を展示している。前海、深圳、香港に蛇口を加えた自由貿易区における優遇政策や發展目標、2025年に完成を目指す地下建設について説明を受けた。

#### 訪問先 前海深港青年の夢工場

面会者	馬雨龍 (Ma Yulong) 前海連合發展ホールディングス經理
訪問概要	前海深港青年の夢工場は、前海管理局、深圳青年連合会及び香港青年協会により設立され、深圳、香港及び世界中の青年による創業を支援しており、現在172の企業が入居している。起業してから上場するまでを金銭的、法的に支援する。香港のシステムを採用したモデルや支援内容について説明を受けた。

#### 訪問先 錦繡中華民俗文化村

訪問概要	1991年に開園し、中国各地の名所、少数民族の生活風景をもとにした住居や建築物を展示したテーマパークである。民族ショーも上演され、様々な角度から中国の各民族の多彩な文化を展示している。中国各地の名所旧跡のミニチュアやチベット民族の住居を見学した他、中国の風俗やイベントを紹介するショーを鑑賞した。
------	--

### 3月16日

#### 訪問先 HUAWEI

面会者	公共及政府事務部 田華 (Tian Hua) 氏
訪問概要	HUAWEIは1987年に設立された通信技術会社であり、現在170か国に支部を持ち、総従業員数17万を有する。行政センターやトレーニングセンター、研究開発センターを車窓から見学し、説明を受けた。その後、生産センター内の行業解決法案展示ホールを見学し、最先端の通信技術やそれを応用したスマートシティの展望について説明を受けた。

#### 訪問先 テンセント

面会者	秦広楠 (Qin Guangnan) 公共政策部高級經理
訪問概要	テンセントは1998年に設立された中国最大のインターネット総合サービスを提供する企業の一つである。インスタントメッセージ「QQ」を1999年に、メッセージと通話のアプリ「WeChat」を2011年にリリースし、2004年には香港の市場に上場した。創業から現在までの歩みや各サービスについて説明を受けた。

## 広州

### 3月16日

#### 訪問先 花城広場

訪問概要	花城広場は2010年の第6回アジア大会開会式会場であり、そのデザインは船をイメージし、3.8万人を収容できる規模を持つ。気候に恵まれ各種の花々が咲き誇ることから、「花城」は広州の別称となっている。
------	--

### 3月17日

#### 訪問先 広汽トヨタ自動車有限会社

面会者	人事総務部技能訓練センター 小田敏之コンサルタント
訪問概要	広汽トヨタ自動車有限会社は2004年9月に広州汽車集団有限会社とトヨタ自動車(株)がそれぞれ50%ずつ出資して設立し、生産能力は年間38万台である。ジャスト・イン・タイム生産の理念を掲げ、部品供給会社を周辺に配置することにより、品質維持と生産の一体化を実現している。2本ある生産ラインのうち、第1生産ラインを見学し、部品取り付けの過程や安全検査について、また自行程完結のシステムについて説明を受けた。

#### プログラム 広東省青年連合会主催歓送会

面会者	張志華 (Zhang Zhihua) 広東省青年連合会主席
プログラム概要	広東省青年連合会の方々や中山大学の学生と共に歓送会が行われた。粵劇「南国紅豆」や箏の演奏、中山大学日本語学科院生による日本の楽曲で歓待を受け、日本青年は、能やよさこい等、日本の伝統芸能や文化を披露し、「ふるさと」を歌った。歓送会の最後には出席者全員で「朋友」を歌った。

#### 訪問先 中山大学

訪問概要	中山大学は、孫文の功績を称えて、孫文の号である中山を冠して命名された。日本語専攻の学生らの案内によりキャンパス内を散策した後、日本青年は三つのグループに分かれ、中山大学の学生らと「経済格差」「少子高齢化」「環境」をテーマにディスカッションを行い、日中両国の現状について理解を深めた。
------	---

### 3月18日

#### 訪問先 広東省博物館

訪問概要	広東省博物館は1959年に開館し、広東地方の歴史、文化、芸術、自然をテーマに展示しており、五つの常設展がある。そのうち、広東地方の民族と海上貿易及び近代史を紹介する広東歴史文化展示室を見学し、「馬壩人」と呼ばれる広東地方における最古の人類の時代から近代までの住居や食事文化、催事、外国貿易の歴史等について説明を受けた。
------	---

## 日中の相互理解をより深めるために

団長 阪本 和道

### はじめに

平成28年度日本・中国青年親善交流事業の中国派遣団は平成29年3月7日から3月18日までの12日間の日程で中国の北京、景德鎮（江西省）、深圳、広州（広東省）を訪問した。今回の派遣は昭和54年の第一回から数えて38回目となるものである。今回の派遣団（以下「38団」という）は本来、平成28年8月29日から派遣の予定であったが、受け入れ側の中国の国内事情により、延期されていたものである。一時は開催されるかどうかははっきりしない状態であったが、内閣府と中国側関係者の努力により、年度末ぎりぎりのこの時期に開催されることとなった。このため、当初参加予定であった団員のうち7名と渉外担当の1名がやむをえない事情により、参加を取りやめざるを得なくなってしまい、彼らにはたいへん気の毒なことであった。また、実施されるかどうかははっきりしない中で長期間よくモチベーションを維持し、ユースリーダー（YL）、アシスタントユースリーダー（AYL）を中心に準備を進めてくれた団員や副団長、渉外の皆さんに敬意を表したい。

### 事前研修（平成28年7月4日～9日）

平成28年度の国際青年育成交流事業、日本・中国青年親善交流事業と日本・韓国青年親善交流事業を合同で実施した。

全体研修では本事業の趣旨、目的や危機管理、プロトコル等についての講義、派遣団OB／OGを交えての過去の事例の研修や夕食交流会などが行われた。

中国派遣団の団別研修においては、自己紹介、アイスブレイキングに始まり、団としての目標・スローガンの決定、団内の役割の決定、訪問国における活動内容の検討、在日中国大使館訪問などが行われた。

中国大使館訪問では、公使の挨拶の後、若手大使館員との交流も行われた。

中国派遣団の団員18（25）名は社会人が2（4）名、大学生が16（21）名、男性が5（6）名、女性が13（19）名という内訳であり、これまでに中国留学経験のある者、今回初めて中国へ渡航する者など、中国語や中国に関する

知識は様々であるが、いずれの者も今回の事業により中国の人々と直接触れ合い、また、様々の施設などを見学することにより、中国のことをより深く理解し、マスコミ報道では知り得ない、真の中国の姿を知りたい、そして、それを今後の両国の友好関係の促進につなげたいとの熱い思いが感じられた（（ ）内は事前研修時）。

そしてその思いを込めて38団としてのスローガンを「広げよう。笑顔あふれる日中の環」とした。この「環」という字には、「つくる、つながる、伝える」という意味が込められている。

目標及びスローガン設定の議論では、横で見ている当初もどかしさも感じたが、一人ひとりが意見を出し合い、最終的に全員が納得して団の目標を決定したことは、時間はかかったが、その過程でチームとしてのまとまりも出来ていき、結果としては良かったと思う。

8月28日からの出発前研修までの間、役割ごとに準備を進めるとともに各自、中国語の勉強等を行うことを確認しあい、オリンピックセンターを後にした。

### 出発前研修（平成29年3月5日、6日）

一旦延期となっていた中国派遣が平成29年3月7日～18日の日程で再開されることが平成28年12月初旬に決定し、同時に出発前研修の日程も3月5日、6日と決まり、3月5日には会場となる一般財団法人青少年国際交流推進センターに、日程延期により参加辞退となった7名を除いた18名が参集した。昨年7月の事前研修から約8か月の空白期間があったが、集まってすぐにチームとしての一体感を取り戻し、担当係毎に出発の準備に取りかかった。思いがけず長くなった自主研修の期間中も団員同士LINEで連絡を取り合っていたようであり、IT活用能力の高さはさすがに現代の若者であると感心させられた。

研修2日目の昼には、内閣府主催で壮行会が開催され、過去の派遣団の団長や駐日中国大使館の参事官にも出席していただき、団員達を激励してもらった。団員達は、中国での日本文化紹介のために準備した歌と踊りを披露するとともに、代表から派遣に向けての決意とお礼を述べた。

## 中国訪問活動（平成29年3月7日～18日）

### 北京市（3月7日～10日）

**3月7日** 我々の乗ったJAL21便はほぼ定刻通り、快晴の北京首都国際空港に到着し、中国訪問活動がいよいよ始まった。北京では丁度この時期、全国人民代表大会を開催中であり、そのためもあって心配していたPM2.5の影響は全く感じられなかった。また、北京滞在中は天候にも恵まれ、毎日快晴で比較的温かった。

空港には、中華全国青年連合会（以下、「全青連」）の張国来さんをはじめとする受入の担当の方々が迎えにきており、すぐにバスでホテルへ向かった。張さん等3名の方々は中国滞在中の12日間終始38団に同行し、お世話をしていた。

全青連で今後のスケジュール等の説明を受けた後、夜は全青連主席助理の万学軍氏の主催による歓迎会があった。歓迎会には在中国日本国大使館の山本恭司公使、森田悠介一等書記官も参加しており、和やかに懇談し、団員達からは早速歌と踊りを披露するとともに「朋友」を万主席助理も加わって日中参加者による合唱となった。万氏の温かい歓迎の言葉と、このパフォーマンスで団員達の緊張も一気にほぐれた。

**3月8日** 北京滞在中の2日目の午前中は、清華大学を訪問し、同大学の学生達とテーマ毎にディスカッションを行うとともに、校内の見学を行った。午後は、全青連の汪鴻雁副主席を表敬訪問した。汪副主席は副大臣級の方であり、大変多忙とのことであったが、約1時間、団員と懇談し、質問にも丁寧に答えていただいた。

その後、中国社会科学院の王金波研究員から中国事情（第13次5カ年計画、等）についての講義を受け、質疑応答では団員から積極的にいくつか的確な質問があり、中国側関係者も事前の準備がよく出来ていると感心していた。

**3月9日** 「青年の声」を訪問した。同組織は全青連の下部組織で、インターネットで若者向けの情報発信、若者からの各種の相談にも応じているとのこと。概要説明の後、意見交換を行った。

昼食後、快晴の青空のもと、天安門広場を視察し、「史家」胡同を訪問した。胡同では近隣の小学生とともに書道体験をし、団員達は小学生とも交流するなどゆったりとした時間を楽しんだ。

夜には、日本訪問団既参加青年との交流夕食会があり、予定外ではあったが、お互いに歌を披露した。

**3月10日** 午前中に在中國日本国大使館を訪問し、山本公使から「外交とは何か」という内容で講義をしていただいた。従来のいわゆる「機密外交」から「公共外交（パブリックディプロマシー）」へと外交の進め方が変化してきている。また、「日中友好」は外交目的、政治ス

ローガンであり、単なる仲良しではない。様々な課題があるからこそ友好が大事である、とのお話は興味深かった。大使館訪問後、中国国際青年交流センターで中国料理の調理体験をし、自分達で作ったギョーザで昼食となった。同センターは日本の支援で建てられたものであり、立派な施設であった。その後、北京空港から空路景徳鎮に向かった。

### 景徳鎮市（3月10日～15日）

**3月10日** 夜、景徳鎮空港に到着し、出迎えの景徳鎮市青年連合会の方々と挨拶の後、ホテルに向かった。

**3月11日** 午前中、ホストファミリーとのマッチングが行われ、団員達はそれぞれのホームステイ先へと向かった。

**3月12日** 夜、ホストファミリーとの交流夕食会が景徳鎮市副市長主催で行われた。団員は日本文化紹介の歌と踊りで大いに盛り上がり、最後のホストファミリーとの別れでは涙するものもいた。

**3月13日** 午前中、陶磁器アトリエにて絵付け体験をし、午後、景徳鎮陶磁大学において、景徳鎮市に関する講義を受け、大学生との意見交換会を行った。相手側学生の数が多く、突っ込んだ議論には至らなかった様子であった。ただし、日本側学生もそれぞれの意見を積極的に伝えていた。

**3月14日** 午前中、進坑村の見学及び桜の植樹を行った。午後、陶磁工場、中国陶磁器博物館及び官用窯を見学した。雨の予報であったが、奇跡的に晴れ、進坑村の窯跡の見学では山路や畑のあぜ道を歩いたり、また桜の記念植樹を行う等、一同久しぶりにリフレッシュ出来た。

### 深圳（3月15日～16日）

**3月15日** 景徳鎮空港を出発し、深圳空港着。前海経済特区および青年の夢工場を視察した。16日は午前中にファーウェイ、午後にテンセントを視察した。両社とも、世界的に有名なIT企業であり、青年達は最先端の技術の説明に興味深く聴いていた。

深圳では、1980年代から経済特区として開発が進められており、東京等先進国の大都市と変わらない発展ぶりであり、今なお新たに高層ビルが建設されている。また、前海地区という場所を視察したが、特区の中の特区というような所であり、実験的な未来都市ともいべき先進的な機能が備わっていた。テンセント視察後、深圳北駅から高速鉄道で広州へ移動した。駅ではパスポートのチェック、荷物検査があり、空港並みの厳重さであった。列車のスピードは280kmとのことで、乗り心地も日本の新幹線と殆ど同じであった。

### 広州（3月16日～18日）

約40分で広州南駅に到着し、夕食後、花城広場を見学した。2010年にアジア競技大会が開催されたところで、

市民の憩いの場となっていた。広州タワーをバックに全員で記念撮影をした。

3月17日 午前中、広気トヨタ自動車を視察した。同社は、地元の広州汽車とトヨタ自動車の50対50出資の合弁会社であり、1万人の従業員が働いているとのこと。カムリ等の車を生産し、順調に利益を上げており、民間ベースの日中協力の成功例の一つである。

午後には、中山大学を訪問し、同大学の学生達と交流し、グループに分かれてディスカッションを行った。ディスカッションは、同大学が経営する立派なホテルのカフェで行われ、リラックスした雰囲気の中で活発な意見交換となった。

夜は、広東省青年連合会主席張志華氏主催の歓送会が行われた。張氏は博士号を持つ科学者であり、何度も日本に来ている知日家でもあった。同氏は、「広州は歴史的に世界に開かれた都市であり、毎年大規模な交易会が開催されている。今後も日本や世界と交流し、協力していきたい。」と語った。団員達は用意したすべての歌と踊りを披露し、感謝の気持ちを表した。中国側からも越劇の実演や箏の演奏があった。

3月18日 午前中、広東省博物館を見学した後、広州白雲国際空港に向かった。空港ではこれまで12日間同行してくれた中国側担当者と別れを惜しんだ。ほぼ予定通り、飛行機に乗り込み、全員無事に羽田空港へ到着し、ホテルへチェックインした。

中国滞在中、鼻かぜを引く程度の団員は何人かいたが、大きな病気や事故、トラブルはなく、日程も全て予定通りであり、スムーズに活動出来た。日本側と中国側の連携がよく取れていたことと中国側の入念な日程の設定、また、団員達が整然と行動した結果であった。

## 帰国後研修（平成29年3月18日、19日）

3月18日は、一般財団法人青少年国際交流推進センターへ移動し、報告書や20日の成果発表に向けての資料作成等を行った。20日の最終日には、事後活動についての説明、本事業の評価アンケートの記入、昼には来賓も参加しての帰国懇談会が行われ、その後成果発表、参加証授与式が行われ、全員に参加証を授与した。別れを惜しみつつ、またの再会を約束して解散となった。

## 全体総括

○事前研修時も訪問活動中も、殆ど団員の自主的な運営に任せていたが、団員達は自主的に門限等のルールを決め、また1日の活動の最後には全員が一言づつその日の振り返りを行い、常に反省や翌日への目標設定を述べ、それが本人の自覚と他の団員への刺激となり、ま

た、積極的に団全体を良くしていこうという前向きな姿勢となる等、大変良い効果を上げていた。そして、事業全体を通じて、団員一人一人が大きく成長したことが感じられた。

○今後の課題としては、12日間という限られた日程の中で、可能な限りの多くの内容を詰め込んだ結果として、一つ一つの活動の時間が短くなり、消化不良となっている面もあった。特にディスカッションは、議論を深めることが難しかったようである。それでも、全員が自分の意見を述べることで、研修としての一定の役割としては、果たしているものと思われた。

○今回、4都市の訪問であったが、それぞれに特色があり、一口に中国といっても、簡単に捉え切れるものではないことを実感した。北と南、沿海部と中部、西部で、かなりの発展の状況等に違いがあるとの説明が中国側担当者からあった。今回訪問したのは、中国の中でも経済発展の進んだ地域で、日本の都市と殆ど変わらない場所であった。西部地域や農村部では、発展の遅れている地域も多いと思われる。

中国側も言っていたが、発展の遅れた西部地域や農村部も見ること必要だと思われる。

○社会科学院の研究者からの「中国事情」に関する講義、景德鎮市での「市事情」に関する講義があり、直接市の担当者等から詳細な説明を受ける機会があり、視察と相まって状況をより深く理解することが出来た。全体的に、視察・交流・講義とバランスの良い訪問内容であった。

○この機会に中国と日本とのこれまでの関係に思いを巡らせてみると、漢字、仏教、儒教、音楽、書、料理等、中国からこれまでに日本にもたらされたものが多いことに改めて気づかされた。

また、この間、日本から中国にもたらされたものも数多くあると思う。長い交流の歴史の中でお互いに学びながらそれを生かして発展してきたのであり、交流と相互理解の重要性が改めて認識された。

○日本人と中国人には共通する面と相違する面があり、その違いを理解したうえでつき合っていく必要がある。その際留意すべきは、外見が似ているために、根本的な思考方法等の内面的違いを見落とし、何となくわかってくれているであろうと思込みがちであることである。この点は十分に留意する必要がある。

○中国の広さを実感できた。北京、景德鎮間は約1100km、景德鎮、深圳間約800kmの距離であり、移動に飛行機でそれぞれ2時間20分、1時間40分を要し、各地の自然と文化も多様であった。

○政治の中心地である北京、古い歴史があり、陶磁器の生産で有名な景德鎮、経済特区として発展著しい深圳、中国南部の商工業の中心的な都市である広州の4都

市を訪問し、それぞれの特徴ある都市の成り立ちに触れることができ、大変有意義であった。

○団員達もそれぞれの都市の違いを感じ取り、また、伝統と歴史のある景德鎮の陶磁器生産現場から最先端の電子機器を生産するファーウェイやネットゲーム大手のテンセントなどそれぞれ特色のある企業や大学、そこで、働き、勉強する人々との交流も団員達に大きな刺激となったようである。今後、この経験を生かして職業生活において活躍してくれるとともに、事後活動として日中交流にも尽力してほしい。

○本事業は昭和54年以来38年の歴史があり、これまで事業に携わった多くの方々の努力により、改善が図られ、また、今回の事業は、日中双方の関係者のご尽力と熱意により、事業全体を通じて素晴らしい内容となっていた。改めて、紙面をお借りして関係者各位に感謝を申し上げたい。